

聖書：マタイ 25：31～46

説教題：最も小さい者たちの一人に

日時：2020年7月5日（朝拝）

終末に関してイエス様がオリーブ山で語られたオリーブ山講話の最終回となりました。イエス様はこの講話の後半部分では、この世の終わりの日、ご自身の再臨の日に向かって、主の弟子はどう歩むべきかについて語っておられます。その主の再臨の日は同時に最後のさばきの日となるのが今日の箇所です。まず31節に「人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます」とあります。すでに24章30節で、イエス様は「天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来る」と言われていました。1回目は人々が見とれるような姿も輝きもない、低いしもべの状態で来られましたが、2回目は輝かしい栄光の内にすべての御使いたちを伴って来ます。そして栄光の王座に着き、御前にすべての国の人々が集められ、地上の行いに従ってさばかれる「最後の審判」の時となります。ここに「羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます」とあります。これはやがての日に「救いに入れられる者」と「そうでない者」とが分けられるということです。羊とやぎは一緒に飼われることが多く、昼間は一緒に放牧しますが、夕方に戻って来ると別々の場所により分けられました。やぎは羊より寒さに敏感で、より暖かいところで過ごさせることが必要だったそうです。このたとえのポイントは、それまで一緒だった者たちは、その時が来ると、2つに分けられるということです。主の再臨の日まで一緒にいた者たちが、その日には右と左に分けられるのです。

王はまず右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」まず先に注目したいのは、その後に語られた言葉です。35～36節：「あなたがたはわたしが空腹であったときに食べ物を与え、渇いていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、わたしが裸のときに服を着せ、病気をしたときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからです。」ここに6つのことが述べられていますが、これらは「愛のわざ」とまとめることができます。そして私たちがここを読んで思うのは、これらの愛の行いは天の御国に入るための条件なのだろうかということです。このような愛のわざを沢山行った人が、天の御国に入るのか。そしてこの箇所が次のように語られる時があります。この後、愛の行いをした人が、イエス様に対してしたという意識は少しもな

かったのに、天の御国に入る者とされたのだから、天の御国に入るには必ずしもクリスチャンである必要はない。キリスト信仰はなくても、困っている人に心を配って色々な愛のわざを行った人は、イエス様に認められて、天国へ導き入れられると。しかしそういうことをこの箇所は語っていません。34節で、王の右にいる者たちは「わたしの父に祝福された人たち」と言われ、さらにこう言われていました。「世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国」。ここに彼らが御国に入るのは、彼らが良い行いをしたからではないことがはっきり示されています。「世界の基が据えられたときから」彼らのために、とそれは備えられていました。ですから彼らが天の御国に入るのは神の一方的な恵みによることが分かります。彼らがまだ生まれていない時、従って良い行いをする以前から、御国は彼らのために備えられていたと聖書は語っています。しかし同時に聖書は、神の恵みをいただいた人は必ず良い行いに自分自身を現すということも強調します。この最後の審判の場面では、確かにそこにいる者たちの「行い」が注目されています。しかしこれは彼らの救いの「原因」「としてではなく、むしろ彼らが救いの民であることの「証拠」として見られているのです。神の恵みによって御国を受け継ぐように備えられた人々は、確かにこのように生きました。その「証拠」あるいはその「実り」がここで確認されているのです。ここから私たちは口だけの信仰、頭だけの信仰であってはならないこと、信仰は行いに結実するものでなければならないことを改めて教えられます。救いの恵みをいただいている人は必ず自分自身を愛のわざ、あわれみのわざに現すのです。そこに神の恵みによって造り変えられている自分自身をあかしすることに至るのです。

さて、こう言われた正しい人たちは問います。「主よ。いつ私たちはあなたが空腹なのを見て食べさせ、渴いているのを見て飲ませて差し上げたでしょうか。いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せて差し上げたでしょうか。いつ私たちは、あなたが病気をしたり牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。」 彼らはいつ私たちはしたでしょうか、特に「あなたに」と問います。これに対して、王座に着いているイエス様は40節でこう言います。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」 さて今日の箇所を理解する上で大きな分かれ道になるのは、この「最も小さい者たちの一人」とは誰のことなのかということです。伝統的に多くの人々は信者・不信者を問わず、すべての困難の中にいる人、困窮した状態にある人、必要を覚えている弱い立場にある人と受け取って来ました。そういう人々に良くすることはイ

イエス様に良くすることなのだ、と。しかしこの「最も小さい者たちの一人」という表現は、マタイの福音書では無制限に広い意味では使われていません。10章42節：「まことに、あなたがたに言います。わたしの弟子だからということで、この小さい者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません。」ここに「この小さい者たちの一人」という言葉が出て来ますが、そこに「わたしの弟子だからということで」と書かれていて、その人は主を信じる信仰者であることが前提にされています。また18章6節に「わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまずかせる者は、云々」とあり、ここでも「この小さい者たちの一人」について「わたしを信じるこの小さい者たちの一人」と言われています。18章ではさらに10節や14節にも「この小さい者たちの一人」という言葉が出て来ますが、同じ人たちを指しているでしょう。また今日の25章40節の「この最も小さい者たち」という言葉の前に「これらのわたしの兄弟たち」と出て来ますが、イエス様が「わたしの兄弟」と呼ぶのはどんな人たちでしょう。12章48～50節でイエス様は「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか」と問うた後、弟子たちの方に手を伸ばして、「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。だれでも天におられるわたしの父のみこころを行うなら、その人こそわたしの兄弟、姉妹、母なのです」と言われました。こうしたことからすると、今日の箇所「わたしの兄弟たち、それももっとも小さい者たちの一人」とは弟子仲間を指していると理解するのが自然です。主の弟子の歩みには色々な困難が伴うことがこれまでも予告されて来ました。ここに出て来たような食べ物・飲み物の問題、泊まる場所の問題、着る物の問題、病気や捕らえられて牢に入れられる可能性についても言われて来ました。そういう彼らが置かれる困難な状態が特に考えられていると言えます。またここに他の限定はありませんので、12使徒や宣教師のような働きをする特別な奉仕者だけでなく、すべての信者が考えられていると言えます。その困難な状態にある一人に愛のわざをし、助けの手を伸ばすことは、わたしにそのようにしたことなのであるとイエス様は仰っているわけです。

改めて心に刻まれることは、イエス様はこのようにご自分に属する最も小さい者たちとも、しっかりご自分を結び付けておられることです。私たちの中で小さく見積もられている人たちがいるものです。教会の中でも、ともするとこの世の基準で人々が評価され、その結果、小さいと判断される人たちが軽んじられる。その人たちは重要でないと考えられ、困難な状況にあっても多くの人々が見て見ぬ振りをする、知らんぷりするということがあり得る。しかしイエス様は「これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さ

い者たちの一人にしたことは、わたしにしたのだ」と言っておられます。このイエス様の目を私たちも改めて持つ者とならなければ！と思わされます。

なおこれはクリスチャンではない人には、そこまでの関心を払わなくても良い、親切にしなくても良いという意味ではもちろんありません。たとえば良きサマリヤ人のたとえでは自分の周りで必要を覚えているどんな人に対しても愛の行いをすべきであることが言われています。たとえその人が敵であったとしてもです。ただ今日の箇所はそこにポイントがあるのではない。むしろすべての人に対してそうあるなら、なおさら一層、信仰の家族である者たちに対しては！ということになります。

さてもう一方の左にいる者たちに向かって王は41節でこう言います。「のろわれた者ども。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。」そして続けて「おまえたちはわたしが空腹であったときに食べ物をくれず、渴いていたときに飲ませず、わたしが旅人であったときに宿を貸さず、裸のときに服を着せず、病気のときや牢にいたときに訪ねてくれなかった。」と言います。彼らが「いつ私たちはあなたにそんな態度を取ったのでしょうか」と問うと、王は45節でこう答えます。「まことに、おまえたちに言う。おまえたちがこの最も小さい者たちの一人にしなかったのは、わたしにしなかったのだ。」と。ここでの「この最も小さい者たちの一人」も、先ほどと同じく主の弟子たちを指すでしょう。主の弟子は当時、そしてある意味で今日もそうですが、世から蔑まれ、小さく見られがちです。宣教のために遣わされた弟子たちも、行くところ行くところで様々な困難、苦勞に囲まれました。また一般の信者も主を信じる信仰生活のために、迫害などによって苦境に置かれることも多くありました。そういう彼らを見ても顧みず、気にも留めないで放置するなら、それはわたしにそのようにしたことなのだと主は言われるのです。それは主と主の御国を大切に考えていないことである。主と福音のメッセージに対する、その人の姿勢の現れです。その人はそのようにして御国を軽んじた人として、そこに入ることはできず、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入ると言われています。最後の46節にも「こうして、この者たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」とあります。「永遠の刑罰」とはどういう意味でしょうか。それは刑罰が永遠に続くという意味でしょうか。考えるだけでも恐ろしいことです。しかしもう片方の「永遠のいのち」が永遠に続くいのちであるとする、それと対になって語られている永遠の刑罰も同じ意味になると考えられます。ヨハネの黙示録20章10節：「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ

込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。」ここにその苦しみは世々限りなく続くと言われています。そしてその後の15節には主の御国に属さない者たちについてこう言われています。「いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」その人たちはそこで悪魔やその使いと同じ苦しみとともにすることになります。これは今日のマタイの福音書の箇所と同じことを語っていると考えられます。このメッセージを割り引いて考えず、むしろ衝撃を持って受け止めることを通して、正しい生き方を選び取るようにと私たちは迫られているのです。

果たして私たちは最後の日、主の再臨の日を見据えてどう生きるべきでしょうか。今日の箇所が述べていることは、ただその日が来ることを漫然と待つのではなく、愛のわざに励むべきであるということです。それによって神の恵みに生きている者であることをいわば証明しなければならない。もちろんそれは人間の力で何とか良いわざをし、それによって無理やりでも自分が天国の民であることの確信を得ようとするということではありません。大事なことは「信仰を通して」その恵みに生きることです。私たちは今日の箇所を通して改めてイエス様のお姿を見させられます。イエス様は栄光に輝く主であられるお方ですが、それにもかかわらず最も小さい者たちを心にかけ、その者たちとともにいる道を選び取られた方です。そのような方だからイエス様は私たちのところに来てくださいました。取り上げるに値しない私たちを心に留めてくださり、その救いのためにご自身の尊いいのちさえも投げ出して仕えてくださいました。主がこういう方であることを感謝する人は、イエス様がそうしてくださったように、私も他の人に対してそうするという生き方へ進むのではないのでしょうか。イエス様がこんな最も小さい者である私を顧み、救って下さったことを感謝して、そのイエス様の視点を共有する者となり、そのイエス様に喜ばれるように、私も最も小さい者たちの一人を大切に、その人に仕えるという生き方に、その感謝を表すのではないのでしょうか。一般の人に対してもそうですが、主にある兄弟姉妹、また主のために労苦する兄弟姉妹に対してはなおさらそうです。私たちの日々の歩み、また態度はどうでしょう。主にある兄弟姉妹の交わりの中で、誰かを自分勝手な目で軽んじていないのでしょうか。あるいは最も小さい者たちの苦境を見ながら目をそらし、一層その人々を軽んじていることはないのでしょうか。私たちはイエス様が与えてくださった救いに感謝していることを、イエス様が大切にしている一人一人を大切にする歩みに現したいと思います。頂いている信仰を、このような具体的わざに現す者でありたいと思います。再臨の日までの与えられている時間を、

そのように活用する者でありたいと思います。そうする者に、やがて来られる王は言ってください。「わたしの父に祝福された人たち。世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」そして私たちの一つ一つの行いを取り上げて、こう言ってくださいます。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」